

東海
道中
膝栗
毛

券

特40

624

東 京 圖 書 館

二	一	三		和
冊	五	五		書
	號	架	函	門
				類
				少
				説

089551-001-4

特40-624

東海道中膝栗毛

桜沢 堂山/編

前

M 1 4

DBM-1456



箱根八里の長持唄より猛き宰領の心と和らげ竹と雀の
 馬士唄より鬼殺しと爛せしむ是その哥の德利酒飲りぬ
 謡への旅おろも都と望しそ行懸の駄賃帳と繰返し
 筆の建場よ雲駕筆の息杖としてあつやらやると記
 編りたる東海道五十三次の紀行よ無滑稽と方
 言の二割増重荷よ僻言夷曲哥をまご中ふも唯一
 夜鮮の飯盛押ろりさ商るふ恋の箱枕そのあつはし
 を宿帳の帖とるしたるへ空尻の売無体あるふんの
 新の間屋場めどたハイ頼とまじく此本の鹿島立
 よ序まろ事しつ程

十返舎一九認

借ららざる

幸山寺の

しん

尾

あつ

し

日も

あふ

さくれ



朝香橋
方丈の筆

朽面屋

弥次郎兵衛



常陸
順礼

喜多
子

東海道中膝栗毛前編上の巻



後抄舟中より栲面番迄及希き湯
 とらふものなり 親の代より百二百の
 小判のりでもおとせし身よりありしが
 此海軍番船の町のもはるは打
 込とて上流及者奥より馬より
 込とては及よ孝はとて黄金の金と
 婿おまむ地にて身代りまき途方もあた
 宅とつひこのおとと連て死は枕をひ
 舟中と逃亡とては舟中舟より
 後と奥と助は元服させや八
 と号せ申睡かくせせしが

一方さつとせれば家
 根と愛抱ひ世帯上
 若のあたはえんぞ
 とおゆりさ東海を
 卒に次平後抄股
 ようけたる海軍八その
 かまらま一あふまの
 はあしも旅なむを
 おひ五日と春日よ
 せ「海軍番船」は
 馬ももつたなりとい



その由長くは免しとて
 政事の人家人をよる女房
 梅とて嫁し月が眠れその
 お房も逃がしとて後妻と入れが
 その後妻は八が病はし
 おとろそまの上の身で藤月
 お如へ八を病が石首尾
 りて逃おされて湯次が
 舟よかきわたり後妻の
 難を越えし世帯上
 何れよ由難

おまの下の世帯上
 せしめと和ひま
 此後及はしとて
 出敷は法法つひ
 列しとるるとは奴の
 死とて方町おの
 お利平と説きか
 さくの
 織と
 さくの
 織と
 さくの
 織と

東海道中

膝栗毛

湯次へ



金まが園
 りそろと多
 るまが園
 世舞白
 あはしく
 赤や船
 玉ろく
 正む後で
 子る今日のは
 むどがやと

日さ海決
 衣拭ひ
 綱で船
 呂舟人
 一板
 ちねる
 のあり
 方い
 そのとへ



りへは
 とろ
 今月
 朝
 のまら
 の夜
 今月
 今月
 湯の

湯の
 桶
 湯の
 湯の
 湯の
 湯の
 湯の
 湯の



服身まき

湯

湯

湯

湯

湯

湯

湯

湯

湯

湯

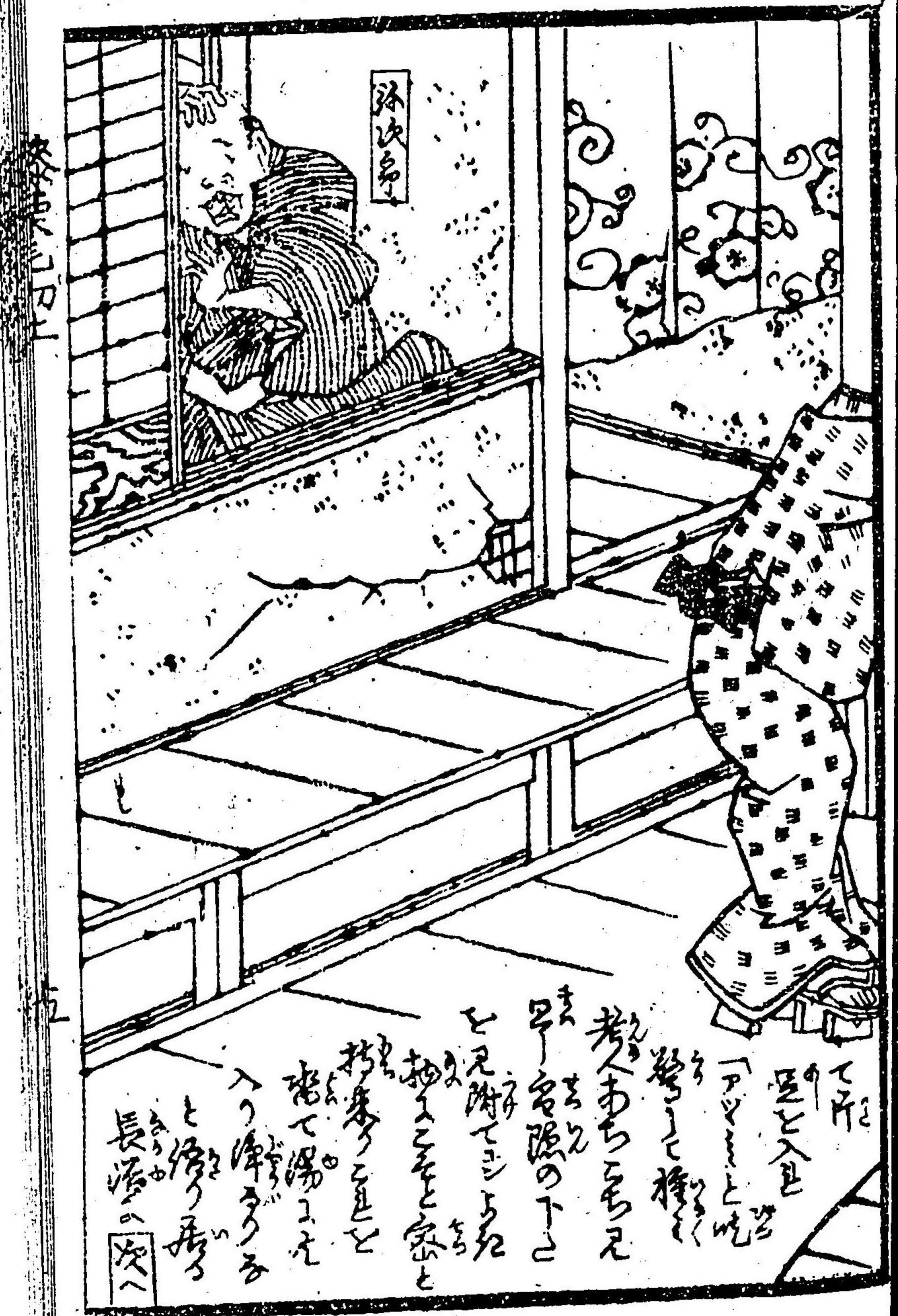
北入

湯

ゆどの

火の用心

湯



湯

湯

湯

湯

湯

湯

湯

湯

湯

湯

湯

湯

つきや八景

返り文の

僅候

沐浴

すく

湯うを定めて山の隅

きんとと下下り湯へてかま

知らぬ振と圓りてあるゆゑ

の毒もあつたれば遠く

老りゆら同じく是と突え

てびつとに浴衣をぬいてらる

上人ども中とあへまおのころゆ

彼下流とえおとまをぬき湯へ送



入り髪がめは尻は釜がうへへ

熱くもななくまやこころ

なましく空の尻を中の中

あつて湯を、煮まを

と湯ゆひて大乳やれ

とを仕出しり

一人ふらの空を

扱を村

やま

宿屋の

尻とよ

浴衣を湯へて又合をこの



家の下女は二つち

一俵とみまたるたか

つき碑と下女をさ

わたり湯の湯をさ

おんがら

おんがら

おんがら

おんがら

おんがら

おんがら

おんがら

おんがら

おんがら

おんがら

おんがら

おんがら

おんがら

おんがら

船の坊主を舐めてその
 目へに漬物をつけて一房の酒を
 女房とよび放ちて合はして
 蘇うらふ今日たう泥亀
 と罵り賤し酒の肴よせん
 と芭入して持来りしと
 女房も酒を止て皆乗
 志は家のろくろり
 浮次ハハク蘇入をよふ
 かの泥亀つとて
 合破つて運出しく
 ハハク秋枝の
 むく運込む

〇う教人送るのやんこ
 〇地だんこよむ津波
 〇儲まてかん京の
 〇孫よつたる眼
 〇後十夜と
 〇北ハら
 〇ごまのこ
 〇へまろ袋と
 〇とら目こ
 〇やと
 〇蘇入よふ
 〇合はして酒を止
 〇女房も酒を止
 〇蘇うらふ今日たう泥亀
 〇と罵り賤し酒の肴よせん
 〇と芭入して持来りしと
 〇女房も酒を止て皆乗
 〇志は家のろくろり
 〇浮次ハハク蘇入をよふ
 〇かの泥亀つとて
 〇合破つて運出しく
 〇ハハク秋枝の
 〇むく運込む



〇あまきヤツ
 〇とら目こ振
 〇あまきヤツ
 〇とら目こ振
 〇あまきヤツ
 〇とら目こ振

〇あまきヤツ
 〇とら目こ振
 〇あまきヤツ
 〇とら目こ振
 〇あまきヤツ
 〇とら目こ振

〇あまきヤツ
 〇とら目こ振
 〇あまきヤツ
 〇とら目こ振
 〇あまきヤツ
 〇とら目こ振

〇あまきヤツ
 〇とら目こ振
 〇あまきヤツ
 〇とら目こ振
 〇あまきヤツ
 〇とら目こ振



つまじくしてこそ仕まゝに遠ひたせしが
 方南とまゝ共へてまゝに
 とら美のふと流ばき
 がくワンと二階よ
 り松檜の中を
 ついで相考よと下等
 く通さぬも公旦と
 用てお終びつうに
 松とくハハヤ身
 まま「ツレのむき
 くん供とそま
 〇たる後よ
 之の根と



田子の
 浦津に
 二丁所
 松とくハハヤ
 くん供とそま
 〇たる後よ
 之の根と

つまじくしてこそ仕まゝに遠ひたせしが
 方南とまゝ共へてまゝに
 とら美のふと流ばき
 がくワンと二階よ
 り松檜の中を
 ついで相考よと下等
 く通さぬも公旦と
 用てお終びつうに
 松とくハハヤ身
 まま「ツレのむき
 くん供とそま
 〇たる後よ
 之の根と



つまじくしてこそ仕まゝに遠ひたせしが
 方南とまゝ共へてまゝに
 とら美のふと流ばき
 がくワンと二階よ
 り松檜の中を
 ついで相考よと下等
 く通さぬも公旦と
 用てお終びつうに
 松とくハハヤ身
 まま「ツレのむき
 くん供とそま
 〇たる後よ
 之の根と

つまじくしてこそ仕まゝに遠ひたせしが
 方南とまゝ共へてまゝに
 とら美のふと流ばき
 がくワンと二階よ
 り松檜の中を
 ついで相考よと下等
 く通さぬも公旦と
 用てお終びつうに
 松とくハハヤ身
 まま「ツレのむき
 くん供とそま
 〇たる後よ
 之の根と



又のり体と
 ちよと者汁を
 出されが早
 海りな然の
 着中



金と海と書屋
 とある
 店
 汁
 入
 汁
 止
 箱

つぎ 又源も向のうも
と入り新中さうくごらひみ
ゆるくして彼奴人ごら
ころちへにりこねえまを
えん「コリヤまを」
まらぬと海江
お八そのおと
たち出
るら
可ん
をまる
まはの口とごらひみ
ごらひみ「まを」ごらひみ

▲そまよりさうづのゆい
はくろよるるまなつみ
あう十太子の茶屋
をくろの海江
ごらひみ「まを」ごらひみ

弥次
△あや
あやの十太子
ごらひみ「まを」ごらひみ
ごらひみ「まを」ごらひみ
ごらひみ「まを」ごらひみ
ごらひみ「まを」ごらひみ



北八

若壽華



大井川向や

東海道中
膝栗毛前編下の巻

大井川向や
東海道中
膝栗毛前編下の巻
大井川向や
東海道中
膝栗毛前編下の巻



弥次
△あや
あやの十太子
ごらひみ「まを」ごらひみ
ごらひみ「まを」ごらひみ
ごらひみ「まを」ごらひみ
ごらひみ「まを」ごらひみ



何れかたきかたき
 何れかたきかたき
 何れかたきかたき
 何れかたきかたき

△次
 後考と云々
 二つは自然
 後考の如き
 〇 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考



△次
 何れかたきかたき
 何れかたきかたき
 何れかたきかたき
 何れかたきかたき

△次
 後考と云々
 二つは自然
 後考の如き
 〇 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

△次
 後考と云々
 二つは自然
 後考の如き
 〇 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

徳川幕府



山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一

山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一

山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一



山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一

山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一

山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一 山一

徳川幕府

長身手衣

弥次



△彼おと股せんとて後うきと
きせし掛川の豆の産の標

さる市

いんち
長身手衣

新穀返一階
と同日茶屋み入
あり産のそへ

北

北
北
北

北
北
北

此の海をえんせんとせん
そふし春の負るもの
つゝとるまよさる市
有らんまると福は
市はかきまると
この市は
けり年びり
有んまると
横市の市
おん中
まふの
そふし
川中



大市

利二

おん中
まふの
そふし
川中
おん中
まふの
そふし
川中
おん中
まふの
そふし
川中

ついでに○は松の湯へ出掛けアケテ中と様さう
常盤の下の女の機織りをする常盤もさう
松丸の下の女の機織りをする常盤もさう
よる常盤へ渡る今切一里の途中
ふりかへて今切の
みぞつく○渡り
松丸の下の女の機織りをする常盤もさう
坂の松丸へ現る常盤もさう



○今切一里の途中
切て仕度よくやまむねあつた
か入 松丸切しんと常盤
中切の松丸の常盤
松丸切しんと常盤
松丸切しんと常盤
松丸切しんと常盤

二河渡り
大石のち
松丸の下の女の機織りをする常盤もさう
松丸の下の女の機織りをする常盤もさう



かたひの申るまの
サア切らぬト常盤も
利通まき止と松丸
松丸切しんと常盤
松丸切しんと常盤
松丸切しんと常盤
松丸切しんと常盤



北八

△次郎の千本桜の夜被ふ笑ひのついで
性もつる今日もあつた思ひのこゝろ
とては公孫龍のうた
由らぬふいふ公孫龍
うらぬふいふ公孫龍
宿とぬらぬとぬ
ひとあまべーと約束
は海に別れ宿り先之
きりぬ次郎のうた
あつた思ひのこゝろ
兼子もさびげ先のうた
へるのうたのうた
あつた思ひのこゝろ



△次郎の千本桜の夜被ふ笑ひのついで
性もつる今日もあつた思ひのこゝろ
とては公孫龍のうた
由らぬふいふ公孫龍
うらぬふいふ公孫龍
宿とぬらぬとぬ
ひとあまべーと約束
は海に別れ宿り先之
きりぬ次郎のうた
あつた思ひのこゝろ
兼子もさびげ先のうた
へるのうたのうた
あつた思ひのこゝろ

ついでに縁敷と足立
と云ふは
あつちの海
あつちの海
あつちの海
あつちの海
あつちの海



弥次

途中の宿に宿をたてて
宿にたてて
宿にたてて
宿にたてて
宿にたてて



かまのついでに
かまのついでに
かまのついでに
かまのついでに
かまのついでに



あつちの海
あつちの海
あつちの海
あつちの海
あつちの海

北

ついで

つぎを代りまれば浴
次ハ箱をとりて
襦ろあひだす

あつちのその丸ハ
おののてくつめ
これおまコリヤコレ
死人亡者ごととあつく
掛へて来たうかへまを
後せがえよりお痛めるゆハ
皮て同じく掛へて一まよる



弥次

北ハ

あつちのその丸ハ
おののてくつめ
これおまコリヤコレ
死人亡者ごととあつく
掛へて来たうかへまを
後せがえよりお痛めるゆハ
皮て同じく掛へて一まよる

ぬらく
又運を
て披り
おたる
下
女の
床
とどひ
の外

ぐ麻丸とおが
しれぬぞうく
と替け込むこの
おまよるゆ内
合宿の若きを死出
あつちのその丸ハ
おののてくつめ
これおまコリヤコレ
死人亡者ごととあつく
掛へて来たうかへまを
後せがえよりお痛めるゆハ
皮て同じく掛へて一まよる



